

新出のソグド語資料について

—新米書記の父への手紙から：西巖寺橘資料の紹介を兼ねて—

吉 田 豊

0 はじめに

筆者は1980年代以降、近年新疆ウイグル自治区および中国本土で発見されたソグド語資料の紹介と研究に努めてきた。その過程で、アスターナで出土した女奴隷売買契約文書（西暦639年）、ベゼクリク出土のマニ教ソグド語の手紙3通（11世紀初め）や仏教ソグド語の断片類、さらにソグド文字で音写したマニ教パルティア語の讃歌を解説した。また昭蘇県の石人に刻まれた碑文¹、クチャ地区では、クムトラおよびキジル石窟寺院で見つかるソグド語の落書きを学界に紹介することができた。2003年西安で発掘された史君墓で発見されたバイリンガルの墓誌は、北京大学の榮新江教授の計らいで、発掘直後に写真の提供をうけ解説することができた。つい最近では、トルファン盆地のバダムで出土し、漢字を刻した官印が押捺してあるソグド語の手紙（662年）の断片を解説し、トルコ系のカルルク族に関わる報告書であることを明らかにした。その後この文書は、おそらく同じ場所で発見されたと考えられる漢文文献と内容が重なっていることが、中国の研究者たちにより明らかにされた²。

¹ この碑文の初歩的な読みは、下記注2に引用された論文「新疆ウイグル自治区新出・・・」の論文で提出された。このテキストの改訂版は未発表だが、大澤孝氏の論文（「新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について」『国立民族学博物館研究報告』20, 1999, pp. 327-378, esp. pp. 334-335）で「解説2」として利用されている。林梅村氏は「解説2」を、筆者の初歩的な解説に対する大澤氏による批判であると誤解している：Lin Meicun, “A survey of the Turkic cemetery in Little Khonakhai”, in: É. de la Vaissière and É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 377-396.

² 筆者の関連する研究をここに列挙する：

「麹氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」『内陸アジア言語の研究』第5号、1989, pp. 1-50。（森安孝夫及び新疆ウイグル自治区博物館と共著）

「新疆ウイグル自治区新出ソグド語資料」『内陸アジア言語の研究』第6号、1991, pp. 57-83.

幸いにも 2007 年 8 月に、大阪大学文学部の森安孝夫教授の科学研究費による新疆調査に参加し、これまでに紹介したもの以外に未公表のソグド語資料がないかを調べる機会が与えられた。本稿の前半では、新出のソグド語資料について紹介する一環として、この調査で見聞した資料について簡単な報告する。後半では、やはり 2007 年に小川貫式—龍谷大学名誉教授の遺品のなかから発見された、いわゆる西巖寺橋資料のなかのソグド語資料を概観し、その内の 1 点について詳しく研究する。

1 2007 年の新疆ウイグル自治区の調査から

2007 年 8 月に行った調査であらたに確認した資料は 2 種類である。一つは 1959 年にマラルバシで発見されたソグド語断片（5 点）であり、もう一つは、ベゼクリクで発掘された漢文の碑文の行間に書かれたソグド語銘文である³。どちらも 2007 年度の調

「ベゼクリク・ベルリン・京都」『オリエント』35/2, pp. 119-134 (W. Sundermann と共著)
吐魯番地区文物局（編）『吐魯番新出摩尼教書信文献及有關問題研究』北京文物出版社 2000
「ベゼクリク出土ソグド語・ウイグル語マニ教徒手紙文」『内陸アジア言語の研究』XV, 2000, pp. 135-178 (森安孝夫と共著)

“Bāzāklik, Berlin, and Kyoto. Manichaean Parthian hymn transcribed in Sogdian script”, in: Ch. Reck et al. (eds.), *Manichaica Iranica*, Band 2, Rome, 2001, pp. 683-695. (W. Sundermann と共著)

“Manichaean Sogdian letters discovered in Bāzāklik”, in: *Annuaire résumé des conférences et travaux* (École Pratique des Hautes Études. Section des sciences religieuses) Tome 109, 2000-2001 [2002], pp. 257-260.

“Sogdian version of the new Xi’an inscription”, in: É. de la Vaissière and É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 57-72. (中国語版「西安新出史君墓誌的粟特文部分考釈」『粟特人在中国——歴史、考古、語言的新探索』(法国漢学 第十輯) 北京、中華書局 2005, pp. 26-42.)

“Sogdian fragments discovered from the graveyard of Badamu”『西域歴史語言研究集刊』第一輯 2007, pp. 45-53. (栄新江らによる関連する漢文文書の研究はこの同じ号に掲載されている。なお大阪大学の荒川正晴氏は、この研究を批判する論文を発表する予定である。)

「研究ノート ソグド人とトルコ人の接触に関するソグド語資料 2 件」(Two Sogdian materials concerning the Turco-Sogdian relationship)『西南アジア研究』67, 2007, pp. 48-56.

バダムで出土した文書の写真は、『新獲吐魯番出土文献 上』北京 2008, pp. 58, 102 に掲載されている。

³ マラルバシの発掘とソグド語文書の発見に関しては伊斯拉菲爾 = 玉蘇甫「新疆新發現的古文献及其研究」『新疆文物』1999-3/4, p. 130 を参照せよ。ベゼクリク出土の碑文についての報告と、

査の行動記録の中に、テキストを発表し翻訳を添えておいた⁴。当該資料の所蔵機関とまだ公表についての協議を行っていないため、ここでは転写や翻訳を添えずに、それらの資料の概要について紹介するにとどめる。

前者は8世紀前後の草書体で書かれており、極小断片ながらソグド人の人名も確認できるので、世俗文書であった可能性が高く、西域北道のこの地域でもソグド商人の活動が確認されることになる。このこと自体は、ソグド人の活動を考慮すれば全く想定内であって何ら特筆に値しない。実際この同じ地域で発掘されたトゥムシュク語の契約文書にソグド人が証人として登場しており、彼らのこの地域での商業活動は確認されていた。文書断片の一つ(59B T.B. 1- 96 1/5)に確認された人名は n'xtβntk と読むことができるが、これは勃興間もない突厥に、北周からの使節として派遣された安諾槃陀と奇しくも同名である⁵。

ベゼクリクで発見された碑文は、漢文面に関する研究が柳洪亮によって発表されていることは注3で述べた。ここで問題にしている銘文は、従来突厥文と考えられていたが実際は丁寧な草書体で書かれたソグド語であった。日付と人名の一部が見えており、ベゼクリクを訪れた人が書き残した一種の落書きであろう。残念ながら日付はほとんどが失われているので、書かれた時代を特定することはできない。人名は wnx'ncwr と myrprn が読み取れる。どちらもトルファン出土の文献で別に知られている。名前の構成から判断してマニ教僧侶の法名であって、ベゼクリクにあったマニ教窟、ないしはそこに居住した同僚を訪問したのであろう。銘文にも βr'trt 「同胞たち」という語が見える。

wnx'n-cwr というマニ教僧侶の名前はベルリンにあるマニ文字で書かれたパルティ

漢文の銘文についての研究は柳洪亮「高昌碑刻述略」『新疆文物』1991/4, pp. 60-61にある。森安によれば銘文の読みはかなり改善が必要であるという。たとえば、森安は10行目に「貞元四年 (= 788 年)」と読んでおり、ソグド語の銘文がそれより後の時代であることがわかる。

⁴ 森安孝夫責任編集『2007年度新疆・山西・オルドス調査行動記録』2008年3月、14-15, 75-76頁。ただしこの行動記録は公刊されていない。

⁵ むろん同一の人物だと言っている訳ではない。ちなみに、少し綴りは違うが、n'xtβntk という同じ名前の商人は、インダス川上流の岸壁銘文にも現れている、cf. N. Sims-Williams, *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus*, II, London, 1992, p. 41. 安諾槃陀の事績についてはしばしば紹介される。とりあえずは森安孝夫『シルクロードと唐帝国』東京2007, pp. 121-122 参照。

ア語文献に wnh'newr という綴りで現れている。最近この文献を研究した Durkin-Meisterernst によれば、これは写本のスポンサーの名前であるという。私有財産を持たないはずのマニ教僧侶がスポンサーになれたかどうかは分からないが、彼が写本の成立に関わった僧侶であることは確実である。同一人物かどうかは決められない。同じ名前はベルリンにある未発表のマニ教ソグド語文書 So 13401 の漢文面にも見えている。表面はマニ教の讃歌 *Gōwišn ī grīw zīndag* のソグド語版で、漢文面には書写した書記の名前が書かれている。この人物と同一人かの判断も難しい⁶。myrprn のほうは、かつて Henning が研究したマニ教ソグド語の人名表に現れる、cf. Henning, *Sogdica*, London, 1940, p. 6。従ってこちらは実在した人物の名前ではない。もう1点は未発表の文書 (Ch/U 6536) に見いだされる。これは漢文仏典裏を利用して書かれた数字のリストであるが、その漢文面の欄外に種々の人名を書いた落書きがあり、そこに現れている。こちらも実在した人物の人名かどうかは確認できない。

ここで紹介した新出の資料2種はどちらをとってもまとまった量はなく、言語学、文献学、歴史学の分野に大きなインパクトを与えるようなものではない。しかし、この種の地道な調査を積み上げて行かなければならないことは言うまでもない。また今回の調査では、吐魯番地区の大半の洞窟寺院、敦煌莫高窟のかかなりの数の窟及び西千仏洞を調査したがソグド語の落書きは見あたらなかった。このことは、同じ場所でのウイグル語の落書きの多さと比較したとき、この地域におけるソグド語の使用の規模(ソグド語話者の人口)や、使用された時代について一定の示唆を与えるものである。

1-1 敦煌およびトルファン以外の新疆で出土するソグド語資料について

筆者は「ソグド語資料から見たソグド人の活動」と題する論攷に於いて、出土するソグド語資料とソグド人の活動の関係を論じた。榮新江も「西域粟特移民聚落考」を発表し、新疆各地で確認されるソグド人の活動だけでなく、そこで発見されるソグド

⁶ D. Durkin-Meisterernst, *The hymns to the Living Soul. Middle Persian and Parthian texts in the Turfan Collection*, Turnhout, 2006, p. 198, n. 418 参照。So 13401 の漢文面に現れる例は P. Lurye が取り上げている, cf. *Orientalische Literaturzeitung* 2008, p. 771, n. 6。これとは若干異なる筆者の解説は *Indo-Iranian Journal* 51, 2008, p. 58 にある。

語資料に注目している。⁷パミール以東に限定すれば、ソグド語資料は主に敦煌とトルファン周辺で発見され、それ以外で発見されるものはごく少数である。従って、今回の調査でマラルバシ発現のソグド語資料の存在が確認されたことは、資料自体は零細であるにもかかわらず重要な意義がある。この機会にいくつか新しい情報を加えて、榮新江の研究に対する補遺としたい。

今回確認したマラルバシ出土断片は、榮新江のリストの中に入れるとすれば、「据史徳」の下に収録されることになるだろう。据史徳はトゥムシュク遺跡がある地域の唐代の地名であることは、榮新江自身が発見した。彼はトゥムシュク語文献で *gyāzdi-* とあるのが原語であり、漢字表記はその音写であることを発見した。その後、D. Maue は *gyā* と読まれてきたブラーフミー文字は *gū* と読むべきであることを指摘し、榮新江の説を補強している⁸。

榮新江の論文では、ニヤ遺跡に関する項目がない。しかし1990年代に行われた日中共同のニヤの発掘調査で、ソグド語の文書が1点発見されたい。『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』第三卷（2007年）の308-309頁に報告がある。94MNA-27T2 (93A27 N37) という番号が付けられた紙文書で、扇形をしており5.8 cm x 5.8 cm の大きさであるという。中国側はこの文書の写真を N. Sims-Williams 教授に送っていて、2008年1月教授のお宅で写真を拝見した。教授によれば、日付が読み取れ手紙の断片と判断されるということだった。書体も古風でニヤ遺跡の年代と合致するという。近い将来発表されることになるであろう。

コータン地区では、マザールターグからソグド語文書が出土しており、スタインが発見している。断片類ばかりであるが大半は発表されている。1点については写真が

⁷ 拙稿「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『岩波講座世界歴史 11 中央アジアの統合 9-16 世紀』東京、1997、pp. 227-248 参照。榮新江の論文は、はじめ『西域考察与研究』1994に掲載されたが、その後増訂されて『中古中国与外来文明』北京、2001、pp. 19-36 に収録されている。近年さらにその補遺も発表されている：「西域粟特移民聚落補考」『西域研究』2005/2、pp. 1-11。

⁸ 榮新江の論文は「所謂“Tumshuqese”文書中の“gyāzdi-”」『内陸アジア言語の研究』7、1991、pp. 1-12にある。Maueの論文は“Konows Zeichen Nr. 10”, in: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan revisited — The first century of research into the arts and cultures of the Silk Road*, Berlin, 2004, pp. 208-212 である。

発表されているが、まだ研究はないようなのでここで紹介しておこう。Sims-Williams and Hamilton, *Documents turco-sogdiens du IX^e - X^e siècle de Touen-houang*, London, 1990, plate 39 に写真が発表されている Fragment 36 がそれである。Hoernle の収集品で、本来コートン出土のコートン語の文書といっしょに整理されていた、cf. *ibid.*, p. 11。筆者は現物を調査できていないので、大きさや紙質などは分からない⁹。

1/[] (..... m't)h mōy xwōn' . . . 母はここコートン (?)

2/[] t' s'r pckwy' kw' 'skwy . . . へ申し上げよ (?)。お前はどこに (?) いる

3/[] 'xwōn' 'skw'm kny mc' . . . コートンに私はいる。kny から

4/[] (.t mc' 'yt β'y . . . お前は . . . から来ることができる

5/[] 't β(s)rw m' n (m) [] . . . βsrwm' という名前の . . .

明らかに世俗文書であるが、解釈は難しい。興味深いのはコートンを表すと考えられる xwōn' と 'xwōn' である。今まではいわゆる Nāfnāmak に、xwōnyk という形容詞が知られていた、cf. Henning, *Sogdica*, London, 1940, pp. 8, 10.

これ以外にも、小断片は知られている。G. Gropp, *Archäologische Funde aus Khotan Chinesisch-Ostturkestan. Die Trinkler-Sammlung im Übersee-Museum Bremen*, Bremen, 1974, pp. 364, 367 において発表されている Trinkler のコレクションの内の 1 点は、Mazar Tagh 出土ではないかとされている。なお Gropp による文字転写は、Sims-Williams, *BSOAS* 42/2, 1979, p. 337, n. 6 において改善されている。Sims-Williams の復元に従えば仏典の断片であるように見える。さらに Franke のコレクションのなかにもやはり Mazar Tagh で出土したとされる文書の断片があるらしい、Gropp, “Eine neuentdeckte Sammlung khotanesischer Handschriftfragmente in Deutschland”, in: W. Skalmowski and A. van Tongerloo (eds.), *Middle Iranian studies*, Leuven, 1984, pp. 147-150 参照。筆者はかつて故 Emmerick 教授のもとにある Franke の収集品の写真を調査された熊本裕教授から、そのソグド語に関する情報を得たことがある。3 行を残すこ

⁹ Hoernle の収集品は一般にダンダンウイリク出土だと考えられている。これも 19 世紀の終わりに地元の住民がそこで見つけていたものかもしれない。

く小さな断片で、手紙の冒頭部の書式を残している¹⁰。

なお、榮新江が MacKenzie に従ってソグド語文書であるかも知れないとしている Or. 8212 (91) = M.T.75D は、筆者自身が 1993 年の夏に調査した。長さ 11.5cm、幅 2.5cm ほどの木簡の破片であるが、文字は読み取れなかった。M.T. は Mazar Toghrak の略号で、そこからは漢文とコータン語のバイリンガルの木簡が多数出土しているから、これもその内のひとつではないかと考えられる。従ってコータン出土のソグド語資料には数えられないだろう。

クチャ地区については、付け足すべき情報は持ち合わせていないが、この間に、キジル千仏洞の壁画に描かれた仏教説話の商人がソグド人の姿で描かれている事実や、クチャ地区でソグド人の納骨器が見つかることが指摘されている¹¹。またペリオの収集にかかるドルドルアグル出土の文書のなかに、ソグド語の文書があり、E. Benveniste によって既に発表されていたことは筆者がかつて指摘していた。そこに新たに数点のソグド語の断片が見つかった、cf. Yoshida, *apud* É. de la Vaissière (tr. by J. Ward), *Sogdian traders. A history*, Leiden, 2005, p. 127, n. 29. ただし小さい断片であることと、文字がかすれていることから判読は非常に難しい。

2 西巖寺蔵橘資料

龍谷大学の名誉教授であられた故小川貫式先生は、生前に大谷探検隊の一員であった橘瑞超氏から、氏が所有していたトルファン出土文書の断片類を送付されていた¹²。

¹⁰ 北京大学の段晴先生からの 2009 年 2 月の私信によれば、最近もソグド語文書がコータン地区で発見されているらしい。この文書の写真は、2008 年初頭に行われた榮新江を代表とするコータン調査によってもたされたようだ。この調査については朱玉麒他「2008 年和田考察行程日志」『西域文史』第 3 輯 2009, pp. 127-151 参照。

¹¹ E. Kageyama, “Sogdians in Kucha, a study from archaeological and iconographical material”, in: É. de la Vaissière and É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 363-396. ちなみに榮新江は言及していないが、トカラ語 B の文書にソグド人の人名 (putteyāne) が現れていることも知られている、cf. D. Weber, *Indogermanischen Forschungen* 80, 1975, p. 97.

¹² これらの文書断片が、小川先生の手元にあったことにことに関しては複雑な事情があったらしい。このことについては橘真敬「大谷探検隊将来「西巖寺蔵橘資料」について」『西北出土文献研究』第 7 号, 2009, pp. 103-112 を参照のこと。

それらは全体で 200 点ほどだが、小川先生の死後、遺稿を整理する過程で発見されたという。この資料については、すでに大木彰・橘堂晃一・吉田豊による簡単な報告が公表されている：「大谷探検隊収集『西厳寺橘資料』について」、『東洋史苑』第 70・71 合併号、2008、pp. 59-79。資料発見の経緯および文書全体のリストに関してはそちらの論文を参照されたい。また文書の写真は CD の形で出版もされている：猪飼祥夫・大木彰・橘堂晃一（編集）『西厳寺橘資料・古写経断簡集成』2008 年 9 月。これらの断片は現在、S[aigonji] T[achibana] 1-181 という略号で整理されている。ソグド語の断片は全部で 40 点あるが、すべて漢文仏典の裏に書かれている。漢文仏典の比定は橘堂晃一氏が行った。筆者は、既にロシア、ドイツ、フィンランド及び龍谷大学所蔵のトルファン出土のソグド語文献で、漢文仏典の紙背を利用して書かれた断片のデータベースを作成しており、比定された漢文仏典を頼りにして、新たに発見された断片と接合するものがあるかどうかを調べることは容易である¹³。この点に関する情報も、今

¹³ 現在ベルリンのコレクションは基本的にすべてがインターネット上で公開されており、漢文仏典のテキストを見ることは容易である。また大半の漢文テキストは原典の比定が終わっており、Reck のカタログに記載されている：Ch. Reck, *Mitteliranische Handschriften. Teil 1. Berliner Turfanfragmente manichäischen Inhalts in soghdischer Schrift*, Stuttgart, 2006。ロシアのコレクションでは、Dx. のグループは、『俄藏敦煌文献』のシリーズで、表裏ともに写真が公表されている。筆者はそこからソグド語の断片を選び出し漢文仏典の比定を行った。一方で A. N. Ragoza, *Sogdijskie fragmenty central'noaziatskogo sobranija Instituta Vostokovedenija*, Moscow, 1980 が校訂したテキストでは、ソグド語面の写真は出版されているが漢文面は未発表である。多くの場合、半透明の台紙に貼り付けてあって、写真ではうまく写らない。筆者は 1990 年代に、これらの写本を保管しているサンクトペテルブルグの東方学研究所を何度か訪れて、漢文のテキストを書写してきた。その情報を搭載してデータベースは作成してある。なお、Dx. のグループでは、ソグド語の断片がどれであるかの特定や、ソグド語のテキストはいまだに発表されていないが、できるだけ近い将来、公表したいと考えている。ここに便宜的にソグド語の断片の文書番号を列挙しておく：Dx. 3198, 6354, 6489, 6910, 6934, 6957, 7038, 7147, 7232, 7251, 7253, 7262, 7347, 7361, 7368, 7646, 7735, 8820, 9063, 9435, 9520, 9528, 9529, 9530, 9538, 9540, 9573, 9574, 9961, 10053, 12048, 12066, 12089, 12267, 12509, 12846, 12848, 12876, 17628, 18649, 18650, 18905, 18907。ベルリンの断片と接合するものは、筆者からの情報にもとづき Reck のカタログで明記されている。またそれ以外でも、Dx. 9574 は Sims-Williams, BAI 4, 1990 [1992], pp. 281-288 で扱われた、ロシア所蔵のマニ教説話の断片群のうちの L69 と接合し、その同じ写本の離れである Dx. 12048、Dx. 12267、Dx. 12066 は、互いに接合することが判明している。

大英図書館が保管するトルファン出土のソグド語文書の裏の漢文についても調査はしてあるが、数は多くないのでここで問題にするには及ばない。なお、ソグド語文書の裏に書かれた漢文やウイグル語、さらにはソグド語やバクトリア語のテキストから判明する事柄について筆者は研究を準備している。

回のリストには加えてある。本稿ではそのうち特に1点を取り上げ、それと同じ文書の離れであることが確認できる龍谷大学所蔵の大谷探検隊将来の資料と、ベルリンにあるドイツのトルファン探検隊将来写本を合わせて校訂する¹⁴。

2-1 ST15 について

ここで取り上げるのは西巖寺資料の15番(ST15)であって、サイズは8,3 cm x 7,5 cmである。漢文面は『大般涅槃經』で、『大正大藏經』(no. 374)第12巻, p. 431b21-25に対応する。漢字の書体から判断すれば、盛唐時代、おおよそ8世紀の写経であったと推定される。ソグド語面はもちろんそれ以降に書かれたものだが、一般にこの種のマニ教ソグド語文献は10世紀前後の写本と考えられている。この同じ写本の断片は筆者が知る限り別に3点存在する。それは龍谷大学図書館に所蔵される大谷探検隊将来の資料と、ベルリンにあるドイツ・トルファン探検隊将来の資料である。前者は既に百済康義・W. Sundermann・吉田豊によって写真付きで発表されている：『イラン語断片集成』京都1997 [1999], pp. 132-133.¹⁵ 後者は未発表ながらReckの上述のカタログに登録されている。そこでは龍谷大学所蔵の2断片とベルリンの断片とが同じ写本に属することが指摘されている。西巖寺資料も含めた4断片の整理番号と、漢文面の対応箇所は以下の通りである：

- (1) Ch/So 14742 (13.5 cm x 33,7 cm): T.T. vol. 12, 431a8-b4
- (2) Otani 7281 (8,0 cm x 5,0 cm): T.T. vol. 12, 431b6-8
- (3) Otani 10001 (8,0 cm x 8,0 cm): T.T. vol. 12, 431b15-19
- (4) 西巖寺 ST 15 (8,3 cm x 7,5 cm): T.T. vol. 12, 431b21-25

¹⁴ なお2009年9月10日ダブリンで開催された第7回国際マニ教学会で、Ch. Reck博士はST 19が、マニ教一般信者の懺悔用の書式であるXwāstwānift XII-XIIIに対応することを指摘した。

¹⁵ 本書は1997年に完成し刊行される予定であったが、百済氏の入院によって刊行が遅れ、実際に世に出たのは1999年であった。百済氏は当初から、大谷光瑞の50回忌を記念し1997年の出版を強く望まれた。手術で声を失われながらも、病室のベッドで抗ガン剤の副作用と闘いながら、出版を遅らせまいと必死で図版の校正をなされた氏の努力を改めて思い出す次第である。入院の原因となった癌に冒され、氏は2004年に他界された。

漢文面とソグド語面では行の運びが逆になっているので、ソグド語面のテキストは上記の順番とは逆になる。また漢文面の1行とソグド語面の1行がほぼ対応するから、(1)と(2)は1～2行の間隔がある。(2)と(3)の間には6行ほどの間隔が、(3)と(4)の間には1～2行分の間隔があったと推定される。

下に提出するテキストからも判明するとおり、Ch/So 14742のソグド語面では両端が残されている。紙背が利用されている漢文仏典は、本来高さ一尺で幅がその1.5～2倍の紙をつなぎ合わせた巻物であった。当時の一尺は26 cm前後であったはずであるから、ここで扱うソグド語のテキストは、漢文の写本を半分に切断し、通常の半分の大きさの卷子本に書かれていたことが分かる。トルファン出土のマニ教ソグド語の文献にはしばしばこの体裁の写本が見られる。筆者と Sundermann が共同で研究した、ソグド文字で音写したパルティア語の讃歌の写本はどれもこの体裁であった：吉田豊・W. Sundermann 「ベゼクリク・ベルリン・京都」『オリエント』35/2, pp. 119-134. Sims-Williams and Halén が研究したソグド文字表記の中世ペルシア語の讃歌も同じ体裁であった：N. Sims-Williams and H. Halén, “Middle Iranian fragments in Sogdian script from the Mannerheim collection”, in: *Studia Orientalia* 51: 13, pp. 3-11. また筆者が幾つかの断片を接合して復元した、Sermon of the Light Nōus のソグド語版も同じように、半分の大きさの卷子本仕立てになっていた：Yoshida, “First fruits of Ryukoku-Berlin joint project on the Turfan Iranian manuscripts”, in: *Acta Asiatica* 78, 2000, pp. 71-85. さらに敦煌出土のマニ文字ウイグル語文献である Xwāstwānīft も、幅が4インチ（10cm ほど）の卷子本である、cf. A. Stein, *Serindia*, vol. ii, Oxford, 1921, p. 925. これは携帯や朗読に便利なハンディーな卷子本として、特定の利用目的に合わせて作成されたのかもしれない¹⁶。

¹⁶ もちろん、これ以外にも理由があったのかもしれない。半分あるいはそれ以下のサイズのハンディーな卷子本は、マニ教文献に限られず、仏教文献にも見られる。筆者が調査したところでは、ブラーフミー文字とソグド文字で表記した Nīlakanṭha-dhāraṇī（敦煌文献）は幅が14.7 cm の卷子本である。最近 Skjærvø が発表したコータン語の護符も幅が8 cm であるという：P. O. Skjærvø, “A Khotanese amulet”, in: M. Macuch et al. (eds.), *Iranian languages and texts from Iran and Turan*, Wiesbaden, 2007, pp. 387-401. これなどはほぼ3分の1のサイズの卷子本であったことになる。

2-2 テキスト・翻訳・注釈

(1) テキスト

ST 15

1/ [] kštry (p)[rm'n-]

2/ [ptγwšy ZY R]YPW-mykw βnty n(w)[y?]

3/ [] (p)tškw'nh cnn

4/ [δwry z'yh] prβ[rt]-pδy'

gap of 1-2 lines

Otani 10001

1/ [](.)[]t (h)

2/ []w xw nm'cw βr'ym

3/ [](.)šw (')xšnkw 'ptry

4/ [pr](y)'n pryt [m?]

5/ <xwt'w>

6/ []'sp'yšty []

gap of ca. 6 lines

Otani 7281

1/ [xypδ]'w'nt (p.)[]

2/ [] (k)štry prm'nptγw(š)[y]

3/ [] (y) βγ []

gap of 1-2 lines

Ch/So 14742

1/ []cnn

2/ [](.)mrts'r

3/ [](.)ZY ptm'k

4/ s'r pwrny δ'rt' ZY kδ'ry

Ch/U 6886

5/ ZKn βγγ xwy-šty nβ'nt

xwyšty nβ'nt/

6/ pr ywk ZY pr 'βs'k

pr ywkh ZY pr 'βs'kw

7/ wɣtw δ'rt' rty kδ'ry ZKn	wɣtw δ'rt'/ rtkδ'ry ZKn
8/ δp'y-rstn šyr'kw ZY βɣ	δp'y-rstny šyr'kk ZY βɣ/
9/ wrɕy' 'skw'm xwyšty	w'rcy' 'skw'm xwy-šty
10/ pr mn' nry ZY ywk m'n	pr mn'/ nry ZY ywkh m'n
11/ z'wr r'y'm skwn kštrw	z'wr zy'mtskwn/ kštry
12/ βnty wnw (z)'wr 'sty myδ ZY	βnty cw t'w z'wr 'sty myδ/
13/ 'xšp' 'ntwxs' skwn	'xšph 'ntwxs'mskwn
14/ w'nw ZY 'sptw-rw	w'nw ZY xwptw/
15/ β'w ZKn 'xškw 'ptry pr	β'w 'xšky 'ptry pr
16/ krm'yr ryt'ky' wrnw	krm'yr ryt'kyh
17/ 'wn'k s'cy mnx'w ky mn'	
18/ βnty s'r 'krtw δ'rt nnk	
19/ δ'rt ZY yβ'r δ'rt'	
20/ ZKn βɣy-šty y'n "γδy	
21/ xcy cw ZY γny ZY š'nwxy'	
22/ mrty'k rβ'nw ZY "n"prs-	
23/ 'ky' wnwnywn kwn'm	
24/ m'xxyδδwkyk šyr'n-	
25/ k'r'k ZY pwny'nk'r'k	

(2) 翻訳

「(ST 15)・・・取るに足りない[召使い]・・・一万番目の僕・・・[から]申し上げる言葉。[遠く] から、足を組んで(?)・・・(Otani 10001)・・・我々は敬意を捧げます。[もしも] そちらの素晴らしい父上が・・・愛おしい者たちのなかで最も愛おしい(?)・・・(彼は) 仕える・・・(Otani 7281)・・・ご主人様・・・取るに足りない召使い・・・(Ch/So 14742)・・・から・・・こちらへ・・・(あなた様は、私に関して) 人間の成長の点で十分だと見なされ、現在、先生様のおそばに教育と訓練のために(私を) お送りになった。そして今、あなた様、私は学校で健勝で平穩にして

おります。先生は私の教唆(?)と教育のために、心の力(或いは:私の力)を使い尽くしておられます。(私)とるに足りない僕も能力と力がある限り、昼も夜も、より上手になろうと努力しています。素晴らしい父上に対して顔を赤くして(>敬意を表して(?))、信仰をそのように必要なものと敢えて私はするだろう(rnx'w?)。僕である私に対してあなたが為し、誹謗として保持し、養いとしてあなた様が保持しておられる(?)。私が技量、優秀さ、男らしさ(?), rβ'nw(?)と'n"prs'ky' (?)とwnwnyw'n(?)を作るのは神々の恩恵と願いである。我々この世の者たちは善行を行う者、功德を行う者……」

(3) 注釈

上掲書で Reck が筆者の発見として言及するように、Ch/So 14742 の 5-16 行目は、並行するテキストが Ch/U 6886 に見いだされる¹⁷。そこで便宜のためにそのテキストを並べて対照しておいた。テキスト中のスラッシュ(/)は、行の切れ目を示している。並行する部分で両者を比較すると、Ch/U 6886 が比較的容易に内容を読み取れるのに対して、Ch/So 14742 のテキストは崩れている印象を与える。たとえば Ch/U 14742 の 13 行目の 'ntwxs' skwn は、この文脈では無意味で非文法的な人称語尾(2 人称単数接続法)を伴っているのに対して、'ntwxs' mskwn は「私は努力している」の意味に解釈できる。

¹⁷ 念のために Ch/U 6886 のテキストを掲げておく。この文書も半分のサイズの卷子本である。漢文面は『妙法蓮華經』で『大正大藏經』vol. 9, p. 55b, 1-8 に当たる。これもやはり唐代の写経である。

- 1/ [(x)wy-šty nβ'nt
- 2/ pr ywkh ZY pr 'βs'kw wγtw δ'rt'
- 3/ rtkōry ZKn δp'yr-stny šyr'kk ZY βγ
- 4/ w'rcy' 'skw'm xwy-šty pr mn'
- 5/ nry ZY ywkh mn' z'wr zy'mtskwn
- 6/ kštry βnty cw t'w z'wr 'sty myδ
- 7/ 'xšph 'ntwxs' mskwn w'nw ZY xwptrw
- 8/ β'w 'xšnky 'ptry pr krm'yr ryt' (kyh)

なお、Ch/So 14742 と Ch/U 6886 はどちらも T II T の整理記号を伴っている。これを信じるなら、トルファン探検隊の第 2 回探検(1904 年 9 月～1905 年 12 月)の際にトユクで発見されたことになる。これと同じ文書の離れである大谷探検隊の収集品は、購入品と考えられる。トユクで見つかったベルリンの断片が、大谷探検隊の収集品およびロシアの収集品と接合する、類似のケースは他にも知られている。Reck 『上掲書』の No. 213 の写本は代表的な例である。

同様に Ch/U 6886 の *cw t'w z'wr 'sty* 「もし能力と力があれば、能力と力がある限り」は理解できるが、対応する Ch/So 14742 の表現 *wnwz'wr 'sty* は意味不明である。ただし全体の字面は、*cw t'w z'wr 'sty* と似たように見えることは注目される。従って、Ch/So 14742 のほうは手本である Ch/U 6886 を、それらしく書写しようとした一種の練習であったのではないだろうか。この初心者は目の前の手本で自分が理解できる部分は、自信を持って正しく表記できたようだが、理解できない部分では、字面が似るようにするのが精一杯だったように見える。

稚拙な書写であるということが災いして、Ch/U 6886 に対応がない部分は判読と解釈がきわめて難しい¹⁸。従って筆者では全く翻訳ができない部分があるが、とりあえず理解できる部分だけを翻訳しておいた。

非常に興味深いことに、この文書は息子が父親に出した手紙であり、本文中に、成人に達したので教育と訓練のために先生がいる学校 (*ðp'yrstn*) に送り込まれたことが書かれている¹⁹。手紙はその父親に宛てた近況報告の練習ないし草稿であったと考えられる。Ch/U 6886 はその手本で、先生が書いて示したのではないだろうか。父親がどこに住んでいたのかは分からないが、マニ教徒が住んでいるようなところであったろう。注 (17) でも述べたように、Ch/So 14742 と Ch/U 6886 の発見地番号はそれぞれ T II T と T II T 1585 で、これを信頼するならトユクで発見されたことになる。彼の父親の居場所はそこから一日で往復できる高昌故城のような場所ではなく、北庭や敦煌のような一定の距離離れた所であったろう。

マニ教寺院のなかには、学校に当たるものが存在し書記たちは訓練を受けていたはずである。敦煌出土の漢文マニ教文献である「摩尼光佛教法儀略」の寺宇儀第五には、マニ教寺院内の建造物として、次の五つがあげられている：²⁰

経図堂；齋講堂；礼懺堂；教授堂；病僧堂

¹⁸ 語末の -y, -w, -r の区別が難しいのも、十分に訓練を積んでいないからかもしれない。しかしながら彼の書体は、稚拙と表現はしたが、一見したところ稚拙ではなくむしろ流麗で手慣れた印象を与えるのも事実である。このようなことがどうして可能なのか筆者には見当がつかない。

¹⁹ Sundermann の見解は Reck 『上掲書』 p. 162 に引用されている：Nach Sundermann ist es wahrscheinlich ein Brief eines Schüler, der in eine Schreiberschule geschicktt wurde, an die Person, die ihn geschickt hat.

²⁰ テキストは『大正大蔵経』54 巻、p. 1280 から引用した。

学校はそのなかでは「教授堂」の一部にあたるのではないだろうか。トルファン出土のマニ教文献には、書記たちがペンを持って書写に励んでいるシーンを描いた有名なミニアチュールがある：Zs. Gulacsi, *Manichaean art in Berlin collection*, Turnhout, 2001, No. 40 = MIK III 6368, pp. 92-95 参照。写字生として、どのような訓練を受けたかは不明だが、マニ教の本の書写をしていたとすればアルファベットの習得は必須であったろう。実際 M 409b および M 1571a には、マニ文字のアルファベット表がある、cf. W. Sundermann, “Iran als Vermittler und Verbreiter fremder Schriftsystem”, *Das Altertum* 31, 1985, pp. 92-97, esp. p. 95. サンクトペテルブルグに保管されている文書である Dx. 8102 もマニ文字のアルファベット表である。ただこちらは、ごく小さい断片で、l, m, n, s が見えているだけである²¹。トルファンからは、ソグド文字のアルファベット表が1点見つかった、cf. 百済他『上掲書』, p. 77 (Otani 2502)。これを、マニ教徒が使っていたかどうか分らないが、文字表の文字はマニ教文献に見られる書体とは異なる書体であることを考慮すれば、マニ教徒が使ったものではなかった可能性が高いだろう。

インターネット上で公開されている写真では、折り跡のように見える線が見える。しかし文書を保管しているトルファン学研究所で文書を研究しておられる Ch. Reck 博士と笠井幸代博士に調べていただいたところ、それは折り跡ではなく茶色いインクで引かれた罫線であることが判明した。前半では罫線に沿って文字は書かれているが、後半では罫線は無視されているという事実も指摘してくださった。また Ch/So 14742 の末尾にはいくらかスペースが残され、しかも内容から判断して手紙がそこで終わっ

²¹ 写経生の練習という点では、現在サンクトペテルブルグの東洋学研究所が保管している、S. Oldenburg のコレクションのなかの敦煌出土のコータン語文献に興味深い写本がある。これは、コータンで使われていたブラーフミー文字の文字表で、そこには sāja vathāyā khu ma dāla na byeha ‘学べ、生徒よ。棒でたたかれないように。」とある。小型の貝葉に丁寧に書写されている。これを発表した R. E. Emmerick and M. Vorob’ëva-Desjatovskaja (*Saka documents. Text volume III: The St. Petersburg collections*, London, 1995, pp. 165-170) は、文書は書記による練習であったと考えている。彼らは幾つかの証拠を挙げてはいるが、筆者にはむしろ手本であったように思われる。漢文仏典の紙背を利用してブラーフミー文字の練習をした例が幾つか知られているので、そちらのほうこそは練習であったのだろう、cf. M. J. Dresden, “Khotanese (Saka) manuscripts. A provisional handlist”, *Varia* 1976, *Acta Iranica* 16, Leiden-Téhéran-Liège, 1977, pp. 27-85, esp. p. 82, s.v. Syllabaries. 敦煌で出土するコータンのブラーフミー文字で表記されたコータン語文献や梵語仏典のなかには、この手本を使っていた敦煌在住の書記たちによって書写されたものが含まれているに違いない。

ていないことから、実際に出された手紙ではなかったと考えて良いだろう²²。

手本を真似て練習した痕跡は Helsinki C + Ch/U6456 + L29 でも見られる。この場合は、手本の行間に同じ内容を書こうとしているが、途中で練習をやめたようだ。同じ内容のテキストは L111 にもみられ、こちらのほうが端正な書体で書かれている。Helsinki C + Ch/U6456 + L29 は L111 を手本にして練習した二人の写字生がいたことを示しているのかもしれない²³。

ST 15, 1-2: kštry (p)[rm'nptγwšy] RYPWmykw βnty 「取るに足らない召使い、一万番目の僕（しもべ）」は、手紙の差出人がへりくだって自分のことを言うときの常套句である。ソグド語の手紙の書式については、吐魯番地区文物局（編）『吐魯番新出摩尼教書信文献及有關問題研究』北京、2000, pp. 250-279 に発表された筆者による「柏孜克里克摩尼教粟特文書信的格式」を参照せよ。ソグド語の手紙の書式から明らかにように、これに先行していたはずの今は失われた部分には、受取人に関わる美辞麗句があったに違いない。

2-3: n(w)[y?]/ [] ptškw'nh 「・・・の申し上げる言葉」。ソグド語の手紙の書式から、ここで破損した部分には、差出人を指示する名前ないしは称号などが期待される。n(w)[y] 「新しい」としたのは、10 世紀のウイグル語文献の奥書に見られる yangi ayduq bitkäci 「新米で下手な書記」に当たる表現を想定したからである。残念ながら対応するソグド語の表現は知られていない。ちなみに中世ペルシア語の対応する表現は dbyr 'y nwg 'wd 'qrwg である、拙稿「中世イラン語と古代チュルク語」『内陸アジア言語の研究』8、pp. 127-133 参照。

3-4 cnn / [ōwr z'yh] prβ[rt]pōy' 「[遠い土地] から、足を組んで (?)」。やはり

²² Reck 『上掲書』 p. 162 によれば、Sundermann は実際に出された手紙と判断していた。Reck 自身は同じテキストを含む別の写本があることから、個人の個別の手紙ではなかったという見解を示している。ちなみに手紙の書き出しで受取人を褒め称える美辞麗句を集めた書式集は知られている、cf. Reck 『上掲書』, nos. 66, 212。ただここで扱った文書は個人的な内容を含んでおり、書式集の一種と見なすことはできない。実際に出す（あるいは出された）手紙の草稿ないしは練習とみなすべきであろう。

²³ この写本と L111 についての研究は E. Morano, “Sogdian tales in Manichaean script”, in: D. Durkin-Meisterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mittelliranischer Zeit*, Wiesbaden 2009, pp. 173-200（特に pp. 178-181）にある。

手紙の書式から、この場所には「遠い場所から」が期待される。cnn δwry「遠くから」だけの場合もあるから、z'yhを補う必要はないかもしれない。その後には、「挨拶する(nm'c βr-)」ことにかかわる表現が続く。受取人の輝く栄光のような敬意を表す対象を特定したり、跪くなどの挨拶をする際の行為を表す表現が期待される。合掌することも代表的な挨拶行為で、prβrtδstwあるいはδstw 'nc'lと表現される。にもかかわらずここでは奇妙にもprβ[rt]pδy'が使われている。「足を組んで」と訳しはしたが、その意味を表すには正しくは*prβrtp'δとあるべきである。一方でβrtpδy'は、形容詞βrtpδ「知らせを受けた」から派生した抽象名詞で「知らせ、情報」を意味し、手紙でも使われる語である。ここで扱っている写本の筆記者は、まだ未熟で正しく書くことができないことがあることは上で指摘した。彼は手本にあったprβrtδstを、βrtpδy'への連想から書き誤ったのではないだろうか。むしろpr βrtpδy'それ自体は「情報において、知らせとして」のように解釈はできる。

Otani 10001, 2: xw nm'c βr'ym「我々は敬意を捧げる」。動詞は1人称複数形になっている。Ch/U 6886では1人称単数形が使われているので、ここでも手本では単数形が使われていたのかもしれない。一方で、手紙文では差出人が1人称の単数と複数で揺れることがあるのも事実で、一概に書き損じとも断定できない。手紙における1人称単数と複数の交替に関しては、拙稿「ソグド語の敬語について」『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』、京都、2006, pp. 81-94 参照。

3 šw 'xšnky 'ptry「そちらの素晴らしい父上」。挨拶に続く部分には、相手の健康を気遣う文言が続く。百濟他『上掲書』p. 133でも指摘したとおり、šwはSims-Williamsが発見した2人称に関わる冠詞に違いない。この冠詞は、たしかに手紙の受取人に関わる部分にはしばしば現れる。

4 [pr](y)'n pryt[m]「愛おしい者たちのなかで最も愛おしい、最も愛された」。pry「愛おしい」は確かに受取人を修飾する一般的な形容詞ではあるが、手紙文のこの位置で現れたことがなく、正しく復元しているかどうか確信がない。

5 xwt'w. 行間に書き足されている。書写の誤りを後で校正したものかもしれない。受取人をxwt'w「王、領主様、ご主人様」と呼んでいたのものであろうが、どのように補うべきか分らない。

6 [ʼ]sp'yšty 「彼は仕える」。通常の手紙の書き出しの書式では、挨拶の後に「もしあなたが元気なら、私は嬉しい」、「私も元気です」という表現が続き、書式の最後は「今この手紙でどれほどか多くの言葉を送りましょう」という内容の一句で終わる。これはまた本文の書き出しの部分でもある。「仕える」は、手紙の書式には見あたらない語であるから、既に本文に入っているのかもしれない。

Otani 7281. 特に注釈を要する語形はないが、残された部分から内容を推定することはできない。

Ch/So 14742, 3-4: ptm'k s'r pwrny δ'rt'. 難解な部分である。ptm'k は 'pw-ptm'k, wyptm'k 「測れない、計り知れない」という複合語で使われているように、「測ること、サイズ」を意味する語である。ただ同じ意味の中世ペルシア語の paymān が、「測ること、サイズ」以外に ō paymān madan で「成人になる」(cf. D. N. MacKenzie, *A concise Pahlavi dictionary*, Oxford, 1971, p. 67) を意味するように、ptm'k にも「基準となるサイズ、成熟」という意味があったのではないかと考えられる。というのも未発表のソグド語文書 So 18140 I verso 6-7 に、文脈は不明ながら次のような一句がある：... tnp'r δ'r'nt rty kw ptm'kh pry-s'nt k'm 「彼らは・・・な身体を保持する。そして成熟(?)に達するだろう」。これは中世ペルシア語の ō paymān madan と同じ構成である。ptm'k にこの意味があったとすれば、全体は「あなたたちは成長(成熟)という点で十分であると見なす」と翻訳されるだろう。つまり手紙の受取人側は差出人を、成人と見なしたと言っていることになる。ところでこの手紙の受取人は父親であることは判明しているから、ここで使われた2人称複数形の δ'rt' は奇妙である。しかし一種の敬語の用法として、2人称単数の代わりに複数形を使うことは知られているので、ここもその用法であると判断し、「あなた様は(私を)成人と見なした」というほどの意味で解釈した。敬語として2人称単数の代わりに2人称複数形を使う事に関しては、上掲の拙稿「ソグド語の敬語」を参照されたい。

4 kō'ry 「今」。7行目に rty kō'ry とあり、それには Ch/U 6886 の rtkōry が対応しているから、kō'ry が kōry の誤写であることが分かる。kōry 「さて、今」は後に kšy に変化するのので、-δr- は [θr] と発音されていたことが判明する。従って δ と r の間に母音は存在しなかったはずである。誤写の原因は kō'ry (< 'krtw δ'ry) 「あなたは為した」への

連想か、kōry 「腹」 への連想であったのかもしれない。

5-16 : この部分は Ch/U 6886 に対応する部分があり、そちらを翻訳した。xwyšty は Ch/So 14742 では xwyštr 「尊長」とも読むことができるが、文脈から明らかに「先生、師匠」を意味する語が期待される。

8 Ch/So 14742 ḡp'yrstn = Ch/U 6886 ḡp'y-rstny 「学校」。中世ペルシア語には同源の dibīrestān という形式が知られている。ありふれた単語ではあるが、ソグド語ではこれが初出である。接尾辞の -stān はソグド語に特徴的な母音短縮を示しているので、借用語であるにしても古い時代に導入されソグド語に定着した語である。

10 nry 「教唆 (?)」。Ch/So 14742 のほうは少し読みづらいが、初頭の n- は明らかである。どちらの写本でも続く r の読みは確定しないが、他の読みは難しい。従来知られていない語で、意味は不明である。直後の ywkh (Ch/So 14742 では ywk) 「教訓・教育」と並列になっているので、類義語であった可能性が高い。「教唆」は試みの訳である。中世ペルシア語の hunar 「技能、美德」から、Av. nar- 「男」、nairiia- 「男らしい」(cf. nyrq < *naryaka- 「男の」) との関連を想定できるかもしれないが、詳細は分からない。

10-11 Ch/So 14742 m'n z'wr r'y'm skwn vs. Ch/U 6886 m'n z'wr zy'mtskwn 「心の力を使い尽くしている」。先生が、生徒である自分の教育に最大限尽力していることを述べているのだと解釈した。m'n は mn' 「私の」とも読めるので、「私の力を使い尽くしている」とも解釈できる。いずれにしても Ch/So 14742 の r'y'm skwn 「私は泣いている」は全く意味をなさない。

15-16 Ch/So 14742 pr krm'yr-ryt'ky' = Ch/U 6886 pr krm'yr-ryt'kyh 「赤ら顔で>尊敬して」。複合語の krm'yr-ryt'ky' は、容易に krm'yr 「赤い」と ryt 「顔」に分析できる。全体は、M qrmr rytty 「赤い顔をした」という aka 語幹の複合語から派生した抽象名詞である。この複合語については W. Sundermann, *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts*, BTT XI, Berlin, 1981, p. 138, n. 1 を参照せよ。Sundermann も指摘するとおり、同義語で構成される近世ペルシア語の複合語の surx-rūy には “rotwangig” 以外に “geehrt” の意味があり (cf. F. Wolff, *Glossar zu Firdosis Schahname*, Berlin, 1935, reprint, Hildesheim/Zürich/New York, 2000, p. 519)、

ここでも「敬意をもって」の意味は文脈に照らして無理がない。なおベゼクリク出土の手紙 B にも、差出人が自分を卑下した表現として (βz)-ryt'kw 「醜い顔の (?)」という複合語が見え参考になる。ベゼクリクの出土のマニ教ソグド語の手紙 B に関しては、上掲『吐魯番新出摩尼教書信文献及有关問題研究』を参照せよ。

16-23. この部分は確実に読むことができる語が少ない。そのことから全体の文脈をつかむことができない。先行する 5-16 でも Ch/U 6886 に対応がなければ文脈をつかむことすらできなかったであろうから、無理もないことではある。我々がよく知っている語が書き損じられているのだろうが、筆者には手本に何があったのかの推定も困難である。確実に読むことができるのは、s'cy (17) 「当然～すべき (形容詞)」、ky mn' βnty s'r 'krtw δ'rt (17-18) 「僕である私に為したところの (人)」、ZKn βγy-šty y'n "γδy xcy (20-21) 「神々の恩恵 (と) 願いである」、γny ZY š'nwxy' (21) 「技量と優秀さ」、cw ZY ... kwn'm (21-23) 「私が～するところの (もの)」である。δ'rt (18, 19) も δ'rt' (19) も読みは確実である。ただ 3 人称単数形の δ'rt は、Ch/U 6886 に照らせば、2 人称複数形の δ'rt' の書き損じであると判断できよう。しかも、ここでは上でも論じたように受取人に対する敬語としての 2 人称複数形である。

wrnw は wrn- 「信仰」の活用形と考えた。'wn'k は 'wn'kw 「その、それ」と比較できる指示詞かもしれない。或いは wrnw-'wn'k という複合語であろうか。

rxn'w は動詞 rxn- の 1 人称単数 injunctive の形式であり、「私は敢えて～するだろう」を意味する。しかし通常この動詞に依存する不定詞が見あたらない。nnk は nnkw, nnk' という綴りで知られている「中傷、誹謗」と同じ語かもしれない。この綴りは未発表の断片 So 14460 verso に、'ntwxc nnk 「苦勞と誹謗」という形で現れている。なお yβ'r 「養う (?)」という動詞の現在語幹は知られている、cf. GMS § 890.

mrty'k は mrty 「男」から派生した抽象名詞と考えた。一見適切な解釈に見えるが、ソグド語には同じ意味で mrt'nyh という語が存在しているので、必ずしも満足のいく解釈でもない。

rβ'nw は初出の語で意味が分からない。RB = mz'yx 「偉大な」に関連する語であろうか。wnwnyw'n も同様である。wnwy 「勝利した (形容詞)」から派生した語であろうか。"n'prs は 'prs 「許す」と関連するように見える。ここでは次の行の 'ky' ととも

に "n"prs-'ky' という抽象名詞を形成すると考えた。意味は相変わらず分からない。

24 m'xxyδδwkyk 「我々 (m'x) この (xyδ) 世界 (δwk) の (-cyk)」ここで初めて遭遇する複合語ではあるが、読みと解釈には問題がない。この文書自体は「善行を為す者、功德を為す者」で終わっているが、ここで文章が完結していたとは考えられない。文の途中で練習をやめたのか、この紙では書ききれないと考えて別の紙に続けたのか判断できない。

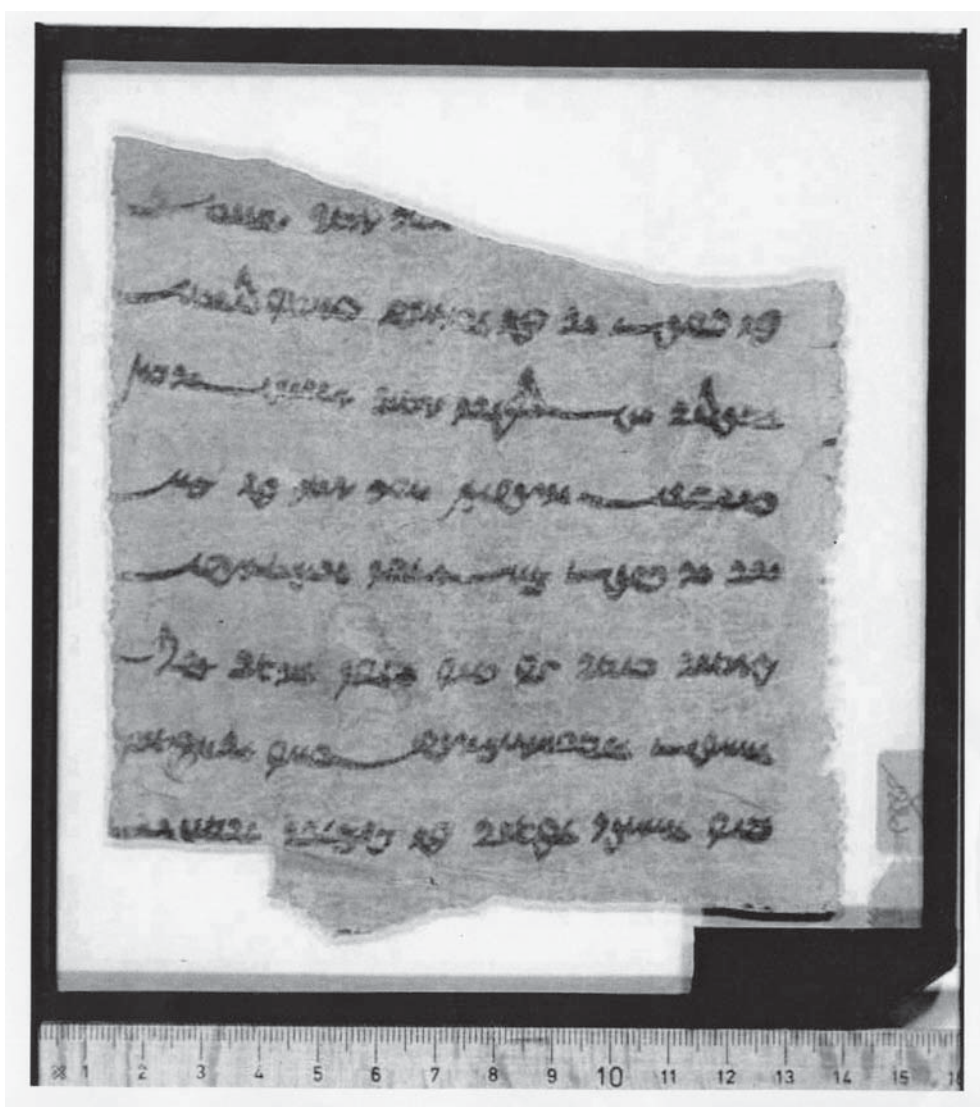
3 おわりに

日本にいて発掘の報告を見ているだけの我々が関知する限りでは、まとまった量のソグド語資料はこの間に新疆ウイグル自治区では発見されていないように見える。一方で、20世紀初頭に発見された文献の中には、いまだに未発表の資料が数多く残されており、それらの研究は急務である。本稿の後半ではその一例として、我が国の大谷探検隊とドイツのトルファン探検隊が発見した2種類の未発表資料の解読を試みた。この2つは同じテキストを含む手紙の草稿であり、一方は初学者の練習であったらしい。彼は書記として訓練を受けるべく自分を学校に送り込んだ父親に、近況を知らせる手紙を書こうとしていたらしい。まだソグド語を十分に正確に書くことができるようにはなっていなかったらしく、読み取れない部分が見られる。もう一方は先生が示した手本であったようで、そちらを読むことによって、この新米書記の意図していた文面が一部明らかになった²⁴。

近年研究が進んでいる旅順博物館所蔵文書のうち1点については、別の場所で発表

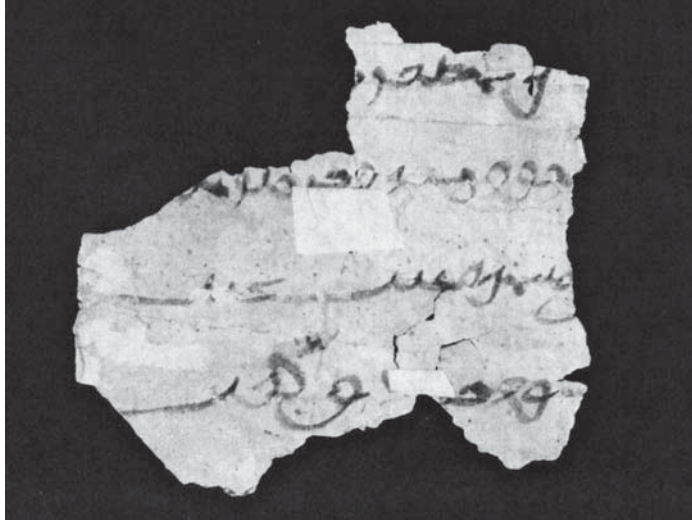
²⁴ 『通典』が引用する韋節の『西蕃記』によれば、ソグド人の男は5歳になると読み書きを教えられたという（男年五歳則令学書）。4世紀初めの「古代書簡」の内の一通は母と娘が夫（父親）に宛てて書いており、女性も読み書きできたことが分かる。この書簡については Sims-Williams, "Towards a new edition of the Sogdian Ancient Letters", de la Vaissière and Trombert 『上掲書』 pp. 181-193 を参照せよ。従って『西蕃記』の記事は必ずしも具文だったとは考えにくい。ただ本稿で扱ったのは、10世紀のトルファンを中心とするマニ教信者たちの事例である。書記たちが主に書写していたのはマニ教の聖典類であり、多くはマニ文字で表記された中世ペルシア語やバルティア語であったと考えられる。唐代以前のソグディアナの事例と比較することはできない。ちなみに、唐代には州学の学生は14歳から19歳までであったという、伊藤美重子『敦煌文書に見る学校教育』東京、2008, p. 22 参照。

することになっているので、そちらを参照していただくことにしよう²⁵。

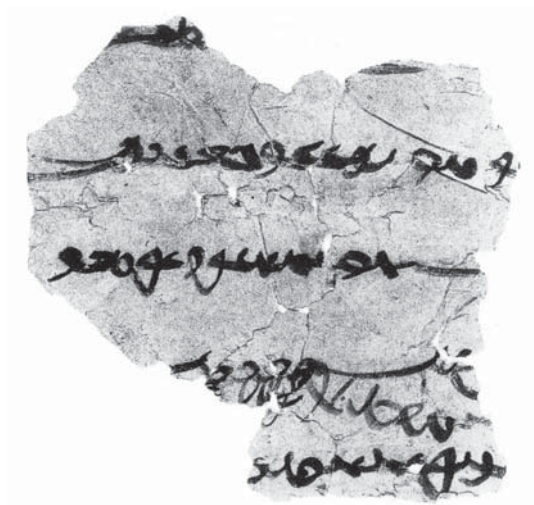


Ch/U 6886 (Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Staatsbibliothek zu Berlin)

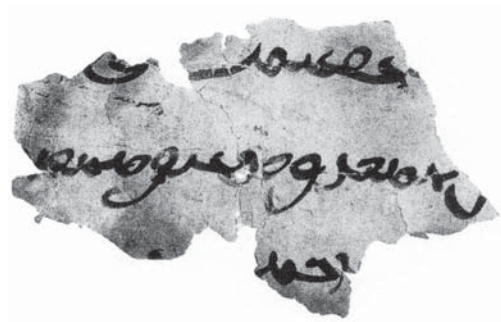
²⁵ この文書は旅順博物館で LM20: 1480/22 (02) の番号のもとに保管されている。写真は、旅順博物館・龍谷大学共編『旅順博物館蔵新疆出土漢文仏教選粹』京都、2006, pp. 204-205 に掲載されている。筆者の論文は、“Heroes of the Shahnama in a Turfan Sogdian text — A brief report of one Sogdian fragment found in the Lushun Otani collection —”というタイトルで、2008 年 11 月 13 日、エルミタージュ博物館に於いて開催された故 Marshak 教授の記念学会で発表した。同名の論文は、この学会の記念論文集に掲載される予定である。



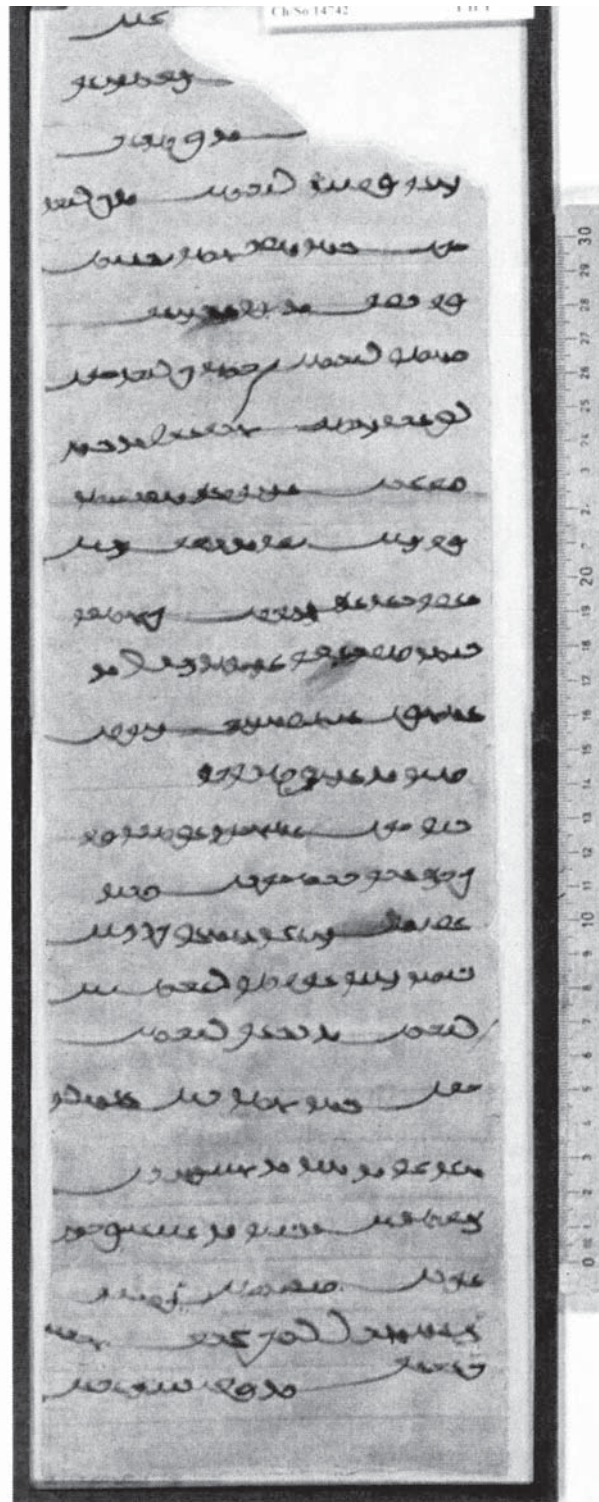
西蔵寺橘資料 No.15



西域文化資料 No.10001 (百濟他 1997 より)



西域文化資料 No.7281 (百濟他 1997 より)



Ch/So 14742 (Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Staatsbibliothek zu Berlin)